

福岡大学医学部同窓会

烏帽子会会報

第22号

第16回 福岡大学医学部同窓会総会予告
平成9年9月27日(土) 午後5時
於 福岡国際ホール

なお当日は午後1時から「アクロス福岡」イベントホール及びギャラリーにおいて、福岡大学医学部創立25周年記念行事が行われます。懇親会は午後6時頃から、記念祝賀会と合同で「福岡国際ホール」で行われる予定です。詳しいご案内は確定次第、別途送付致します。



特別寄稿

なぜ学生教育か 1回生 林 英之 (5ページ)



会長のひとりごと

会長 高木 忠博 (1回生)

『遠山の金さん』からチョット見えた事

『この桜吹雪を、忘れちゃいめえな!』と啖呵をきる、ご存じ、あの金さんの登場です。これを見て、我々は気持ちがかさかします。『なぜでしょう?』なぜ、金さんを、我々は好きなのでしょう? 普段は下町の長屋にマツタク庶民の生活をしていて正義感のある少しおっちょこちょいの、気のいいお兄ィさんで、それは仮の姿、本当の姿は名北町奉行、遠山金四郎(景元)! これがたまらなくいいのだらうと思います。弱きを助け、悪をやっつける。どんな誘惑も撥ねつける気っ風の良さ、

しかも色男。そしてそれを、実直で純朴な取り巻きが、金さんの手となり足となり、喜々として情報を掻き集め、事件の中で、時には自分の命を危険に晒しても必死で情報を集めます。その時には、『金さんが、何時か必ずあの人間を救い、事件を解決してくれる……。』と疑いもなく信じて、そしてそれを夢みて物語が進んで行きます。所で、話は大幅に変わりますが、最近新聞で日本の行政中枢で色々なスキャンダルがありました。国家公務員一種試験に合格して、『国家』を動かす資格を得

目 次

会長のひとりごと	(高木忠博)	… 1
表紙写真説明	(井上俊孝)	… 4
特別寄稿		
なぜ学生教育か	(林英之)	… 5
教授就任挨拶		
教授就任のご挨拶	(大島一寛教授)	… 8
これまでの十年をバネに	(坂田則行教授)	… 9
教授退任挨拶		
退任にあたって	(奥村 恂教授)	…10
退任のご挨拶	(小田禎一教授)	…11
退任にあたって	(重松峻夫教授)	…12
福岡大学医学部を去るに当たって	(白川光一教授)	…13
退任にあたり	(古川達雄教授)	…14
医局紹介		
生化学第二教室の紹介	(辻岡 寛)	…15
耳鼻咽喉科医局紹介	(坂田俊文)	…16
パニックマニュアルについて思うこと	(木下昭生)	…17
支部便り		
熊本支部	(魚返英寛)	…18

宮崎県支部総会報告	(野田 寛)	…19
大分県支部会だより	(鬼木寛二)	…19
佐賀県支部便り	(内田俊文)	…20
キャンパス便り		
医学祭を終えて	(前川信一)	…21
卓球愛好会の活動状況	(工藤忠睦)	…21
空手愛好会	(平田顕士)	…22
フェンシング愛好会	(内藤雅康)	…22
ソフトテニス愛好会	(西村卓朗)	…23
漕艇愛好会	(富安孝成)	…23
海外研修を終えて	(鬼倉基之)	…24
出会いとやさしさ	(重森 裕)	…25
訃報・原邦夫君を偲んで	(山崎 節)	…26
教職員人事		…27
医局長・医長名簿		…28
会議報告		…29
ホテル割引案内		…29
同窓会の保険へ加入お願い		…30
事務局からのご連絡		…31
告! 第11回生諸氏		…32
編集後記		…32

て、50年前から身を粉にして今日を作り上げた人達がこんな事をしたと言って、喧々諤々と話題になっています。この二つの話は、或る共通点があるように思いました。そのKEY WORDは、『信じられる人—それを信じる人の関係』と言えるかもしれません。見てみると、『金さん—その取り巻き』、『官僚—国民』の関係は、上記のKEY WORDと全く同じではないでしょうか？ では何故結果が違うのでしょうか？ 当たり前ですが、架空と現実の違いです。前者は脚本が変わらない限りハッピーエンドが続きます。しかし後者はそうならなかった。巷での論評は『官僚側についてのシステム、個人などの批判が殆どのように思います。なるほど克明に分析をして行けば行く程、色々な事が明らかになりました。分析論は、『官僚』ばかりのものが殆どの様です。(因に、猪瀬直樹著『日本国の研究』は、ご一読をお勧めします。)しかし、これは見方が少し不公平な印象をうけるのは小生だけでしょうか。『その取り巻き心理』にもメスを入れる必要が有るのではないかと思うのです。先ず『金さんドラマ』では、『完璧人間—金さん』に対する『絶対の信用』と言う無意識の深層心理が、基本に流れているのではないかと思うのです。そして、これが取り巻きの人達の無意識の部分に作用を及ぼして、『それに付いて行こう』…となる。これで万事順調に事柄が進んでいきます。現実社会も初

期の頃は、殆どこれに近い状況で旨く事は進んでいたのではないのでしょうか。しかし、時間が経つにつれて段々おかしくなっている部分が明らかになって、ハタと気が付き、明白な『負』の部分が表面に出て、それにスポットが当たったり、皆が急に頭から湯気を出して怒っているというのが現状のように思います。落ち着いて考えてみると、人間に『完璧』なんぞ太古の昔から無い事は、初めから至極当然の事ではなかったのではないのでしょうか。しかし不幸にして、ちょっと前まで我々は、『いろいろの事が起こっても日本には、優秀な官僚がいるから大丈夫ダ！』テナ事を、皆があまりにも無責任に、あまりにも疑いなく信じて発言していた事は忘れてしまっている様に思います。そして、この様に自分達が発言していた事に付いて、自らに、『何故、自分達は、その様に考えてしまったのか？』『その様に、思考せしめた深層心理は何なのか？』との疑問を、反省を込めて自問自答してみた事があるのでしょうか？そして、次の様な事は、考えられないのかとってしまうのです。『ひょっとして自分達は、心の深層の根本部分では、『こんな人達に使われたい』と思っていたのではないか？、だからこんな事が起こったのではないのか』と。この様に原因を考える事は、非常に不自然な考えでしょうか。又、これを一言で表現すれば、『依頼心と同じ心情』と言えるのではないのでしょうか。

『中津の論吉さん』と『カーチスさん』

『依頼心』の反意語に、『自立心』がありますが、これに関連して思い出される言葉に、福沢論吉の、『一身独立して、一国独立す』と言うのが有ります。正にこの言葉の中に一連の疑問の解答は詰まっている様に思います。社会の出来事の観点から我々『同窓会』を見ると、考えさせられる教訓が多々あるように小生には思えるのであります。論吉の言葉を一部言い換えて、『一同窓生(学生)独立して、一同窓会(大学)独立す』にしても、含蓄のある言葉(理念)の様に思えてならないのですが、会員諸氏は如何でしょうか。又、

この様な『心情』に関して、もう一つの原因として頭に浮かんだ事があります。それは、この様になるまでに心の中に在った『我々の無関心さ』です。これがもっと早い時期に、『無関心』が『関心』に変わっていれば、結果はもう少し違っていたのではないかと思うのです。又々話が少し飛躍して申し訳ないのですが、カーチスという社会学者が、『民主主義というイデオロギーは、まず個人一人が「選挙に行く」という、至極単純な行為から始まる』と話しているのを聞いた事があります。そして話を続けて、この『個人が選挙に行く』

即ち『個人が参加する』方向に気持ちを向かわせる為には、本人に『関心を持つ』という、根本意識が絶対に必要である事を、非常に強調していたのを覚えています。反対に『無関心』は、『民主主義の首』を知らない間にジワジワと締めて行き、気が付いた時には大変な事になっている事が多いので、一番注意を必要とする事を知っていなければならないと話

したうえで、最後に、『そもそも民主主義というのは、「発生した結果」の最終責任は個人々々が負う』との約束が在って、初めて成立するシステムである事を知っておくべきである。と話を結んでいました。こうして考えて見ると、何か、起こるべくして起こった事のような感じがして来るのですが、会員諸氏はどの様に感じられましたか？

『コンピューター』と『チャーチルさんの独り言』

サテ我らの『烏帽子会』運営コンピューターは、一応皆さんの暗黙の合意の元に、前述の『民主主義的に』と云う基本システムを採用した機械ですが、このシステムを十分に作動させる為には、色々な手順を踏まねばならず、非常に面倒なシステムの様で、我々オペレーターは悪戦苦闘しながら機械を動かしていますが、今一つスムーズではありません。聞く所では何でもマイクロソフト社の『関心』ソフト、『参加』ソフト、『自主』ソフトを入れてバージョンアップすると、物凄く動く様に

なると聞きましたので、もし、そのソフトを持っておられる方がいらっしゃいましたら、出来るだけたくさん貸して頂きましたら幸甚に存じます。ところで少し昔に、この『民主主義』システムを使われた、チャーチルさんと云う人が、このシステムの面倒さに、思わず『民主主義なんかクソ喰らえだが、しかしこれしか無い！』とボヤかれたとか？ なんとなく、ホッ！と安堵しました。安堵した所でペンを置きます。

表紙写真説明

この写真は、ポルトの市内電車です。一昨年（1995）の秋に訪ねました。以前から鉄道の乗り歩きをしていますが、国内の鉄道はすべて乗ったため、この数年は海外の市内電車、S Lや超特急を中心に訪ねています。

ポルトは、ポルトガル第二の都市で、ドウエロ川河口の大西洋に面した港町で、ポルトワインの積み出し港として有名です。ここの市内電車は戦前の古い車両で、大西洋岸からドウエロ川沿いと旧市街をコの字に結んでいます。のんびりした景色のよいところを走っていますが、数年前から廃止がいわれており、すでにないかもしれません。

唐津赤十字病院麻酔科 井上俊孝（10回卒）

表紙写真にご協力下さい

烏帽子会会報では今回から、その表紙を会員の作品で飾ろうという事になりました。写真に関心のある方、どうか作品をご提供下さい。ご提供戴いた作品はお返し致します。写真のサイズは問いませんが、できればL～2L版程度でお願いします。

福岡大学医学部同窓会事務局 TEL 092-865-6353 内線3032

特別寄稿



なぜ学生教育か

福岡大学眼科勤務 林 英之 (1回生)

同窓会諸兄の中で福大医学部の発展を望まない人がいるとは思えません。いやな言い方ですが、自分が卒業した大学のランクが上がリ、他人に自分の出身大学を聞かれて胸を張って答えられる、あるいは出身の大学の名前を告げるだけで人の見る目が変わる、さらに何らかの余恵を得ることができる。こんな楽しいことはないと思います。現実には決してそうではありません。

ではどうすればランクアップするのでしょうか。時間が経過し伝統が生まれればよいのでしょうか。

しかし残念なことに評価というものはいくまで他の大学との相対的な比較の結果です。従ってランクを上げるためには、他の大学を追い越さねばなりません。ところが時間がたてば他の大学はより長い伝統を誇るようになります。だとすると、ただ漫然と時の経つのを待っても何の救いにもなりません。

もう一つ新たに新設医大ができるのを待つという手があります。我が大学を含む新設医大の設立ラッシュの頃には、以前には下位ランクだった大学が何となくランクアップしたような印象を受けました。同じサルでも古手のサルは新入りのサルを上下に見るわけです。しかし残念なことに、医大の数は完全に充足し、これ以上の新設など望むべくもありません。逆に医師過剰時代を迎え医大数の削減すら討議されている今日この頃です。

ある人は同窓生の中から教授ができればよいといいます。確かにそれもよろしいかもしれませんが、これはやはり本人の努力と才能とまた幾ばくかの運にまかされる問題で、他人が努力したからといってなかなかどうなるも

のでもないようです。そうなるかもしれない人に期待して勝手に努力させ、少なくとも邪魔はしない程度にとどめておく方が無難でしょう。またある人は同窓生からの浄財を募り、病院や研究施設あるいは同窓会館などを寄贈してはという人もおられるようです。これまた重要なことではあると思います。しかしながら同窓生の数は古い大学ほど多いのです。各年度の卒業生数はどの大学でもほぼ一定ですので、平均余命から考えて第50回もしくは第60回卒業生を迎える頃には私どもの大学の同窓生数も他の大学に比べて遜色のないものになっているとは思いますが、それまでは他大学に比べてより多くの負担を強いられることとなります。また面白いことに、いわゆる格の高い大学ほど同窓生個々からの寄付の額が高いとされています。考えてみればこれも当然で、自分がその大学を卒業したおかげでその後の人生に何らかの益を得た人は、生きている限りその利益を受け続けたいと念ずるものでありましようし、そのための費用を惜しむことが少ないのかもしれませんが。私どもの同窓生に同じ気分を望むのは無理でしょう。それでは何らかの方法で入学する学生の質を向上させればよいのではないのでしょうか。しかしながら最大の難点は学費です。本学は6年間の総額で4000万円に近い学費が必要であり、一方では600万円以下で卒業できる大学がある限り、入学生の質の急激な向上は期待することは困難です。一方では大学の財政からいって学費の減額は望むべくもありません。だとすると可能なのは、手に入る範囲の素材をどこまで育てられるかという問題になります。すなわち学生教育です。

もちろんそれ以外にも同窓生のつながりを密にするとさまざまな考えがありましようし、それらのいずれにも意味あることだと考えられます。しかし現在福大医学部、病院に勤務する同窓生の一人として何ができるかを考えた場合、最もやりやすい分野はやはり学生教育ではないかと思えます。

ではどのような教育ができるのでしょうか。教育の成果を評価することは容易ではありません。個々の学生について見れば受けた教育の善し悪しをその進捗で測ることも可能でしょうが、ひとつの教育施設全体の教育を評価するのは困難です。

しかし幸か不幸か、医学部卒業生には医師国家試験というものがあります。医師国家試験の当落が個々の卒業生の医師としての適確性を評価する指標になるかどうかについては論の多いところだと思います。しかし大学全体を評価するひとつの指標として一般に認められていることもまた否定できないと思えます。また私見を言わせていただければ国家試験は、一部でいわれるような難問奇問が百出し医師としての適性とは関係のないものとばかりとはいえないと思えます。たしかに問題の一部に不適切なものもあるようですが、全体としては医師として必要な最低限の常識を問うていることが多いようです。極論と思われるかもしれませんが、そのような最低限の資格試験である以上、卒業生の5%前後は何らかの原因で不合格になるとしても残りの95%は問題なく合格してほしいと思えます。ところが悲しいかな私どもの後輩の卒業生の合格率が90%を越えたことは、あとにも先にも一度きりです。また卒業生中の合格者数が90人を越えたのもその1回限りです。他の多くの大学が常時90%以上の合格率を示しているのに比べると明らかに悪い数字といえます。実際に例年発表される全国医科大学の医師国家試験合格率順位では、福岡大学は多くの場合下位10校以内、1度は最下位になったことすらあります。最近数年間の成績を見ても、4人ないし6人不合格者が増えれば福岡大学は容易に最下位となりうる現状にあります。逆に5人合格者数が増えれば中位程度にまで順位が上昇します。そこから合格率などはそ

の程度のものだと判断される向きもあるかもしれませんが、合格者数ならびに合格率を長年にわたって見てみますと、それらがよく安定しているのに驚かされます。合格率は決して偶然によるものではないようです。これをすなわち学生の質によるものと片づけてしまえば議論はそこでおしまいになります。願わくは教育により改善する余地があると信じたい次第です。

そのような考えに多くの異論があることは承知しております。国家試験の合格率に意味があるかないかという議論はさておき、そのように国家試験の合格率に焦点を合わせた学生教育というものはあるべき姿ではないという意見があり、またそのような教育とは医学部の国家試験予備校化ではないかという意見があります。ならば逆に質問をさせていただきたい。医学教育のあるべき姿とはなんでしょうか。医学の基本的な部分は学生個々が教科書を読んで理解すべきで、教官の講義とは教科書に未だ記載されていない最近、最新の知識あるいは教科書だけでは十分な理解が得られない点についてのみ詳しく説きあかすべきでしょうか。確かにそれは教育の理想ではありませんし、少なくとも文化系の学部などでは、それ以外の方法はないのかも知れません。しかし医学領域では、新卒の卒業生には浅くとも広い、まんべんない知識こそ期待されるべきものではないでしょうか。そのような広範な知識を欠けるところなく覚えさせるということは必要だと思われま。特に学生の質を考えるならばより低いレベルの学生にこそ濃厚な教育が必要ではないかと思われま。

実際に高度な医学教育というものは、教える側に立てば楽な場合も少なくないといえます。口はばったいようですが、いやしくも大学の教官たるもの自分の専門科の中でさらに細分化された自分の専門領域のことならばいくらかでも詳しく話すことは容易です。自分の専門領域外のその科の基本的事項をどれだけ明瞭に知識として分け与えるかではないかと思えます。

また大学の予備校化といわれますが、医学部は学問の府であるとともに、ある意味では

職業訓練校の一面も持っていることは忘れてはならないと思います。だとすれば入学させ6年間にわたって進級させ学費を頂戴した後で医者になれんのは質が悪いからだというのは問題があると思います。

このように考えた結果、今年度、医学部長、教務委員、ならびに同窓会長の賛同を経て6年生中でも成績不良学生を代表に補修講義を試みてみました。なぜ同窓生に担当してもらったかと申しますと、学生に接して驚いたからです。基本知識が驚くほど欠如しており、またその点に極めて無自覚であり、大学が自分たちにとって有用な知識を与えてくれる場であるという意識の欠如、そして自己に対する甘えなど、なるほどこれは学生の質といわれてもしょうがない面があると痛感させられたからです。このような対象を相手にして、あえて自分の時間をさき、無償で、ぬかにくぎを打つような、徒労に終わると思われる努力はやはり同じ集団の中からでてきた人間でないとできないと思ったからです。実際に講義を担当して下さった同窓生諸兄には何とってお礼を申し上げていかわかりません。この場を借りて感謝の念を述べさせていただきます。果たしてこのようなことが効果があるか否か、おおげさを言えば、今後の大学の展望も含めて心から期待しその結果を待っているところです。

その間に、まさに医師国家試験の予備校の存在を知りました。その予備校講師のなかに各大学に訪問講義をしている人物がおられます。決して安価ではありません。ちなみに公衆衛生実力アップコース3日間で約300万円、画像診断を含む内科の重点講義が5日間で600万円、各マイナー科が90万円～160万円で、近くの某私立大学では公衆衛生の講義が行われたと聞いております。福岡大学でも以前に1回行われたことがあるという話であり、本年の6年生の中にもそのような出張講義を希望しているものが多数いるということです。マイナー教科の教官のはしくれの一人としては、そのような講師の方がいらっしゃって眼科の講義をされたならば、首でもくくりたい気分になるかあるいは眼科の診察室に連れ込んで

レーザー光凝固でも身を持って体験させてやりたい気持ちになることは間違いないと思います。こんなものをあがめさせてはならないと思います。こんなものに頼らなくても何とかしてくれるのではないかという信頼感を何とか持つてもらえないかと思います。

かつての同級生、後輩から、その子ども達がそろそろ大学入試の季節がさしかかるといふ話を聞くようになりました。そして、同窓生の子弟の入学に関しては母校としても多少は条件を考えてくれてもいいのではないかというような話も聞くことがあります。そういうことは私の全く関与できない問題ではないこともたしかです。そういう発想がよくないことだとも思いません。逆になぜもっと多くの人がそのような希望を述べられないかということが疑問に思われます。私どもの大学は子弟の出来が多少悪くとも何とか入ることのできる大学でした。現在もそうかもしれません。何としても自分の子弟が入学してほしいと願わざるを得ないような大学になる日はまだまだ先のことでしょう。出来が悪くとも何かと手を加えて何とか一人前にしてくれる大学、少なくともそうしようと思っている人たちがいると信じてもらえる大学、まずそれを目指すべきではないかと思う今日この頃です。

第91回国家試験成績（平成9年）

		受験者	合格者	合格率 %
新	卒	109	93	85.3
既	卒	28	18	64.3
合 計		137	111	81.0
新	私立平均			90.3
卒	国公立平均			91.7

教授就任挨拶



大島一寛 教授略歴（昭和15年7月11日生）

- 昭41. 3 九州大学医学部卒業
インターン終了後、広島赤十字病院、県立宮崎病院勤務
- 〳45. 7 九州大学医学部助手
- 〳46. 9 福岡大学助手として香椎病院へ出向
- 〳48. 4 福岡大学医学部泌尿器科学併任講師
- 〳55. 4 福岡大学病院講師
- 〳57.10 福岡大学医学部泌尿器科学助教授
- 〳61. 4 米国ミシガン大学へ留学（昭62.3迄）
- 平 8.10 福岡大学医学部泌尿器科学教授

教授就任のご挨拶

泌尿器科学教授 大島一寛

同窓会の皆様には元気でご活躍のことと思います。今年は医学部開設25年目にあたり、医学部にとっても同窓会にとっても重要な節目の年になりそうです。記念行事の準備も着々と進行中と伺っておりますが、発展を続ける今日の福大医学部の姿と共に二十一世紀に向かっての展望も示されることでしょうか。これを契機に同窓会においても益々の充実と飛躍を心から願って止みません。

さて、私は平成8年10月1日付けで泌尿器科主任外教授に就任し、小児部門を担当して再出発させて頂くことになりました。主任外教授制度は全国でも例のない制度ですが、福大ならではの制度を有意義に活用して福大発展のために微力ながら全力を尽くしたいとおもっています。皆様にも宜しく御支援の程お願い申し上げます。

福大泌尿器科は開設当初から小児患者が多く、診療の重要な柱の一つになっていたことは講義、BSL実習などを通して気づいておられたことと思います。通常、大学における小児泌尿器関係の入院患者数は泌尿器全体の10%前後ですが、当院では平均25%と群を抜いています。院内の診療科表示プレートに小

児泌尿器科と併記してあるのもそのためですが、最近では福大卒業の諸先生からも紹介患者が徐々に増えて、学外で活躍しておられる先生方の裾野が確実に広がっていることを嬉しく実感しながら診療にあたっています。

私自身は坂本名誉教授、有吉現主任教授と共に開設当初（詳しく言えば開設準備段階の香椎病院）から福大にお世話になっておりますので、同窓会の皆様全員に一度は接したことになりますが、関係のない領域に進まれた先生方には馴染みも薄いと思いますので宣伝を兼ねて簡単に仕事の紹介をしておきます。年間入院約150名の殆んどが尿路・性器の先天異常で手術的治療を必要とする患者です。水腎症、膀胱尿管逆流、停留精巣、尿道下裂がおもな疾患ですが、なかでも逆流性腎症に関する仕事では既に2名が学位を得て、来年は日本逆流性腎症フォーラムを主催することになっています。また、尿道下裂では一期的手術をいち早く導入して西日本各地から紹介を受けているのも特徴の一つでしょう。

近年のテクノロジーの進歩はめざましく、水腎症などは胎児期に発見される症例も多くなってきました。これに伴って入院患者も新

生児・乳幼児が中心となっていますので、今後は産科・小児科・小児外科との密接な連携が大きな課題となりそうです。

福大病院の玄関には「ヒポクラテスの誓」の銅板がありますが、私が滞在していたミシガン大学の小児病院玄関には「子供は神から

の預りもの、病を癒して神の手に戻す」といった意味の文章が掲げられていました。少子化時代の今日、一人でも多くの子供の健康を回復させて元気に社会へ戻すことが私の務めと思っています。



坂田則行 教授略歴（昭和23年10月27日生）

- 昭48. 3 群馬大学医学部卒業
- 〳52. 3 群馬大学大学院医学研究科修了
- 〳52. 4 群馬大学医学部附属病院医員（中央検査部病理）
- 〳55. 4 群馬大学医学部助手（第二病理）
- 〳57. 4 群馬大学医学部講師（第二病理）
- 〳62. 1 福岡大学医学部助教授（病理学第二）
- 平 8.10 福岡大学医学部教授（病理学第二）

これまでの十年をバネに

病理学第二教授 坂田 則行

十年一昔と言いますが、私が福大医学部に世話になってちょうど十年がたちました。この間、病理学の講義と教室での研究、及び病理解剖と生検診断に携わって参りました。私が福大に関わりを持つようになったのは、動脈硬化の研究を通じてのことです。大学を卒業して以来、馬鹿の一つ覚えで動脈硬化の研究をしていたところ、私の先輩で山梨医大の教授をなさっている吉田先生から、第二病理の竹林先生を紹介されたのがきっかけです。九州という遠いところでの生活にやや戸惑いもありましたが、思い切ってお世話になろうと決心し関門海峡を渡って参りました。以来、福岡博多の地で生活し、子供たちはすっかり博多っ子になってしまいました。私の家では親は関東弁、子どもたちは博多弁で話しています。これもまた、オツなものです。

この十年は、私にとってはとても貴重な時ではなかったかと思っています。第一に竹林先生のもとで研究を自由にさせてもらえたことです。研究テーマに関しては、循環器の病理という範囲内ではありますがまったく自由

でありました。また、竹林先生は研究内容でのアドバイスはしてくれますが、研究費や研究器材の使用については何も言わず、自由に使わせてもらいました。おかげで、福大でのこの十年での研究が、今後の私のライフワークになったようです。第二に、若い人たちと一緒に研究する楽しさと大変さを経験したことです。この間、何人かの福大卒業生が私と一緒に研究し博士として巣立っていきました。研究は基本的には研究者自身の努力がもっとも大事ではありますが、ひとつの大きなテーマの下で、各自の専門を生かした分業は、研究をより効率よく進めるうえで大切なことと思います。又、一人で考えるだけでなく、ディスカッションを通して問題をより深めることは、研究を進めたり論文を書き上げる際にはなくてはならない重要な作業です。その意味で、第二病理の若い医師たちとの研究は、私にとっても大変有意義なものでありました。第三に、福大医学部の研究、教育環境の充実していることです。もちろん他大学と比べてどの程度であるかなどということは私にはわ

かりませんし、細かく比べるつもりもありません。しかし、少なくともこれまで研究を進める上で不自由を感じる様なことはありませんでした。又、ハード、ソフトを含め将来しようとしている研究に関する環境も十分備わっていると思います。また、図書館の蔵書の豊富さを実際肌で感じ、すばらしいと思いました。

しかし、受験生が減っていく現在、これからの大学をめぐる環境は決して楽なもの

はないと思います。このサバイバルレースに勝ち残るためには大学自身の自己変革が必要であり、大学にいる私たち自身がその責任を負っていると思います。この十年の間に福大で培ってきた財産をバネに、これからも福大の若い先生方と一緒に、泥まみれになって頑張っていきたいと思っています。そして、そのことが魅力ある福大医学部作りに貢献する道であると信じております。

教授退任挨拶



退任にあたって

内科学第一教授 奥村 恂

退任にあたって思い出すことは沢山ありますが、ここでは二、三のことに限って述べましょう。

福岡大学に医学部の増設が認められたのは1971年(昭46)で、147名の新入生がありました。翌年の4月1日辞令をいただき、内科第一のスタッフとして代替病院の香椎病院(もと九電病院)へ赴任したのは6名でした。

サナトリウム風で、牧歌的な情緒がありましたが、大学病院とはいいい難いものでした。パトカーに先導された香椎から七隈への「世紀の患者移送」を完遂して、新装の福大病院が開院したのは8月4日、それから無我夢中の診療が始まりました。文部省は教育病院の剖検率を高く維持するよう厳しく指導していました。内科がやらねばと使命感に燃えて、私も夜中に剖検のお願いに駆けつけることが何度もありました。

76年(昭51)4月から、5年生に対するベッドサイド教育が始まりましたが、教育病院の経験のない看護部、事務部には相当な困惑があったようです。

その頃、第1回生の組主任を命ぜられました。理由は、臨床教育の根幹は内科学である。医師国家試験に一人でも多く合格させるのが至上命令である。まず隗(カイ)より始めよ、すなわち内科学第一の教授が適任である。というような理由でしょう。現在のように手厚い担任制度とは違って、担任は私一人だけです。暗中模索の苦難の日々が続きました。6年生になると学生は63人に減っていました。模擬試験によって、成績のよくない半分を芥屋の国民宿舎に缶詰めにして泊まり込みで特訓をしました。寒風吹きすさぶ中での特訓は鬼気迫るものがありました。

その結果、特訓組の10人を含めて計41人の合格がありましたが、この数は全国最小、合格率は下から2番目でした。当時入院中の河原学長に、このことをお詫びに駆けつけたところ、「いや、よくやっていただきました」と手を握ってお礼をいわれたことを忘れません。第1回卒業生もいまや地域医療の中堅として堂々と活躍しつつあります。

78年(昭53)、医学研究科(大学院)の設置

が認可され、研究も軌道に乗ってきました。最近では教室から国際誌への掲載も年平均15篇を越え、医学博士を授与されたものも現在56名に達しています。

卒業生が次第に増加してくると第二病院の設立が要望されるようになりました。84年(昭59)に故小野山伝六先生を長とする筑紫病院開設委員会が発足し、私も委員として参画しました。地元医師会との交渉が難渋を極め、深更におよぶこともしばしばで、ある夜は先方の発言に小野山先生が激昂され、その後は出席なさらなくなったので、私が矢面に立ちました。6月、豪雨の中での開院披露宴は印象的でした。



退任のご挨拶

小児科教授 小田 禎一

昭和50年に就職して以来、22年が過ぎた。その間、多くの方々のお世話になったことは忘れがたい。紙上を借りて御礼申し上げる次第である。私は、福大医学部に勤務できたことを、本当に幸いだったと思っている。あまり巨大でなく、人間の顔を持ち、私学らしい自由さがあり、また、すべての面で豊かであった。今後望むべきことは少々あるにしても、前向きに進んでいるのは確かであり、将来が期待される。

考えてみると、私のやり甲斐の多くの部分は、学生諸君に負うところが大きかった。当然、卒業生諸氏もこれに含まれる。教育の場面では、たしかにいま一つ努力が必要であろうと感じることも多かったが、一般に、素直で気立てが良く、卒業後に伸びるタイプである。余力も温存しているのであろう。何より嬉しいことは、医師としての適性を、確実に持っていることであった。知識や技量はいつでも補えるが、適性は補うことができない。それは即ち、優しさ、思いやり、人の悩みへ

この20年余りの間に国際情勢も、日本の政治、経済、医療制度も急速に変化しつつあります。未曾有の高齢化社会の出現も目前です。一方、医学の進歩は留まるところを知りません。これらに刻々対応できる医学研究、研修システムの確立が必要です。

本年度わが医学部に分子腫瘍センター(がんおよび関連疾患の診断と治療に対する遺伝子工学的な新戦略)の設置が認可されたと聞きました。これをバネにして研究活動のさらなる活性化が期待されます。

福岡大学医学部が名実ともに西日本の雄として発展することを切に祈っています。

の共感などである。自ら悩んだことのない者には育ち難い徳なのかもしれない。福大の学生諸君は、多少とも挫折感や劣等感を抱えていることが多い。それが実は、良い医師を育てる土壌なのではないか、と私は考えている。逆に、順風満帆でプライドに満ちたコースを歩む者は、たとえ知識だけは一流であっても、人間性に乏しく、度しがたい医師不適合者に終わることも稀でない。私は、もう一度どこかの大学に勤めてよいと言われたとしたら、躊躇なく再び福大を選ぶであろう。但し、学生諸君が安住することなく、根気よく努力を続けることが条件である。

ところで現実には、充実していたとはいえ悩みの多かった年月も、終わりに近い。医学の速い流れから離れて、一市井人として隠棲するのが私の望みである。自然科学には終わりというものがなく、常に進みながらも不完全のままである。医学の精神的側面にも、完成というものはない。いずれは道半ばにして医学と別れる運命にあるのが我々である。追

い続けた未完成の仕事が、幾粒かの芥子種のように将来芽吹くことでもあれば、以て多とすべきであろう。私が受け持った小さな時代は終わったが、後のことは何ひとつ心配していない。特に、私がお世話になった小児科に関してはそうである。何と恵まれたことであろう。感謝に堪えない。

医の心や臨床のあり方は、これからも変わ

るはずはないが、科学としての医学は、今後約5年間で、驚くべき変貌を遂げ、医学再編の時代が訪れるであろう。福大生諸氏の、新時代へ向けてのご活躍を心から期待したい。私は、街の片隅から、時代の担い手たちの活躍を、祈りに似た気持で、黙って見守ることとする。



退任にあたって

公衆衛生学教授 重松峻夫

昭和49年に福岡大学に着任して23年、学内外の多くの方々のご支援のお陰で無事停年退任を迎える事ができ、お世話になりました皆様に心より感謝致します。23年という永い年月も経ってみれば速く、短く感じられます。公衆衛生学教室の創設、新設医学部の基礎づくり等、様々の問題もありましたが、今振り返ってみると楽しい思い出が多く、ことに当初の1～3回生の教育は、少ないスタッフで講義実習に頭をひねって工夫したものでした。また、他方仕残した事も多く感じられますが、本当に思い出深い23年間でした。

福大医学部も創設25周年、第2の発展期を迎えています。教授会も若い世代への交替が進んでいて、これらの若い世代による新たな発展が期待される所です。21世紀に向かって社会は大きく変化しつつあり、さらに社会経済の発展、科学技術の進歩と人口の少子高齢化、押し寄せる国際化の波は、変革のスピードを大きく加速しています。大学を取りまく環境も大きく変わりつつあります。著しい少子化の進行は、大学冬の時代の到来とも言われ、ことに私立大学の発展には苦難の時期となりかねません。同窓会の皆さんが大学のスタッフと共に考え、共に力を尽くす支援が望まれる所です。

さらに医学部は、来るべき超高齢社会に対

応して進められつつある保健医療体制の改革にどう応えるか、今後10年余りの高齢者数の激増、医療費の巨額化（2025年には110兆円超）、扶養負担の増大は、保健、医療、福祉のサービス体制の改革、整備を急務とし、政治行政も既にその働きをはじめていて、いずれも住民の身近に適切なサービスをとの旗をかげ、地域指向を明らかにしています。地域医療体制の整備確立のために、医療の機能分化と機能連携が強く求められ、かかりつけ医制度、訪問診療体制、在宅ケア、地域医療支援病院、地域中核病院、長期療養型病床群、緩和ケア病棟、特定機能病院等々、多くの施策が進められようとしています。そういった中で医療を担う医師像をどう画くのか。その次代の医師を育てる医学部の教育はどうあるべきか、今こそしっかりと考えて医育体制を整えなければならない時に来ています。同窓会の皆さんの日々変わりゆく医療体制の中での体験と考えの反映が大切であるように思います。

4年前思いもかけず日本公衆衛生学会の理事長に選ばれ、それ以来この保健医療改革の問題への対応に直面して来ました。その中で医育機関としての医学部を振り返って、考えさせられる事が多くあります。基本的にはこの大きな改革の流れとその速さについての再

認識と、我々自身の意識の変革が必要だと思
います。どうか同窓会の皆さんも時代の流れ
をよく見つけ、母校医学部の新たな発展に力
を貸して戴くことをお願い致します。

長年の間、気持ちよく働かせて戴いた大学
当局、医学部・病院、そしてわが衛生学・公
衆衛生学教室のスタッフの皆様にご心より御礼
申し上げます。



福岡大学医学部を去るに当たって

産科婦人科学教授 白川 光 一

福岡大学医学部に24年間奉職させて頂いた。
私の人生の3分の1強であり、医師としての
年数でいえば半分強に当たる。いろいろと感
慨は尽きないが、第一には、70才までの24年
間もの間雇用して頂いた学校法人福岡大学に
対する感謝の念である。と共に、自分なりに
努力したつもりではあるが、見るべき成果を
あげ得なかったことに内心忸怩たる思いが強い。

第二には、この間、若い学生および医局員
の諸氏と学びつつ、診療や研究にも従事でき
た喜びである。老け込みかねない年令になっ
ても本を読み、辞書を繙きつづけ得たのはな
によりも有り難かった。ことに現今の医学部
学生や、若い医局員の約3分の1は見目麗し
き女性であり、華やかな雰囲気か漂っている。
私共の学生時代とは大違いである。そのよう
な環境での勉強や研究などは実に楽しいもの
であった。また、よく考えてみると、私共の
時代の入試はほとんど男性のみであったから、
合格の困難性は現実の約2分の1であった訳
であり、“よかったなあ”との思いに駆られ
ることも再々であった。

終わりに、福大医学部の学生ならびに卒業
生に対する私の要望を述べておきたい。その
一つ目は、大学生活では勉強とともに、でき
るだけ多くの良き友人、知己を作ることの重
要性が言われている。ことに同学年者間のみ
ならず、先輩や後輩とも友好の輪をて拡げて
切磋琢磨すべきである。昔から“学校では
良いことも悪いことも先輩や後輩から習う”
とか“先輩や後輩があつてはじめて真の学校

教育ができる”などと言われる所以である。
私は現在の福大医学部ではこの点が十分では
ないと考えている。ことに先輩・後輩間での
切磋琢磨が不足のように思う。最近漸く、卒
業生有志が後輩の国試対策などへの積極的指
導や協力を開始しはじめているのは誠に喜ば
しい。どうか今後大いに推進して行って欲し
いものである。私は附属看護学校の設立初期
に、約6年半の間、校長を勤めた。当時、私
が最も腐心していたことのひとつが“まだ先輩
がいない”と言うことであった。関係各位の
ご努力もあって、第1回生がその困難を克服
し得た後は、順次、先輩が後輩を激励、指導
し、以来20年間、国試合格率100%を堅持し得
ている。

二つ目は、初期の卒業生に対する要望であ
る。福大医学部の卒業も今年で20回に達した
のであるから、そろそろ母校を背負って立た
んと志す動きが出て来ても良いのではないか
と考える昨今である。実際問題としては、さ
まざまの複雑で困難な事情が存在していて、
非常に難しい問題であることは良くわかる。
しかし現在の時期としては、語弊があるかも
知れないが、蛮勇を奮つてでも、教授選に立
候補する心意気を示して欲しいと熱望する。
それが今後の motivation を昂める為に大いに
有効だと考えるからである。また私は福大医
学部卒業生にも、それに値する優れた人材が
いると認識している。

卒業生諸氏のご精進、ご研鑽を望むや切なり、である。



退任にあたり

薬理学教授 古川 達 雄

福岡大学薬学部には1968年大学院が設置されるにあたり、薬理学教室の教授として着任し、教育・研究に当たっておりました。その後医学部の新設により、1973年に同学部に移り、再び職員の机・椅子のあるだけのゼロから薬理学教室の創設に与り、その年より早速講義・実習を開始することになりました。当時は薬学部との兼担のため、両学部を行き来し、薬学部の仕事は従来と全く同様に処理しながら、医学部では創設に伴う多大の雑用をこなし、早速講義・実習を始めました。加えて看護学校、非常勤の他大学などもあり、週四日位の講義・実習に与りましたので、日曜日も来学して、他の仕事や原稿書きなどを処理する生活が続きました。さらに国内学会の種々の委員、さらに海外の委員による年三回以上の海外出張を加えて学外での仕事も増え、海外より夜十時過ぎに帰国しても、翌朝はいつもの通り朝早くより出校して仕事を処理するような生活でしたが、今思い出しますと大変充実した日々でした。

研究につきましては機器のほとんどない状態でしたが、なんとか工夫しながら開始し、次第にレベルを上げて展開していくことができました。多くの大学院生・研究生なども研究に参加されるようになり、その結果として学位を取得されて行かれましたが、このように若い方々の参加が、教室の活動を大変活発にしてくれました。

教育につきましては、質問はいつでもどこでも受けるようにしているのですが、大変熱心で前向きの学生も多い一方に、オシャベリ・居眠りその他、ただ出席のため座っているだけの学生もかなりあって、私の教え方が悪い点もあるでしょうが、気になるところでした。大島教授（眼科）とご一緒に学年担任

をした時に、九重登山を含むフレッシュマンキャンプ、看護実習の新設、三年生でのオリエンテーションキャンプを講義中心より、ハンディキャップを持った人達、老人医療などの現場を見学・体験した上で討論して医療を考えるよう改変し、医師になることへの動機づけをしっかりとさせるようにしたつもりですが（その時の卒業生の現役だけは、久留米のそれより極めて僅か上だったように思います）、なんの目的で医学部に來たのか気になる学生さんも多く、これらの人達を前向きにさせることの難しさを痛感し、なんとか出来ないものかと気がかかっております。

退任するにあたり、なにか一人合点のことを書いてしまったようですが、本医学部・病院のますますの発展を乞い願っている点では人後に落ちないつもりです。長の間のご厚情に御礼申し上げますとともに、色々失礼な点も多かったかと思ひます。どうぞご容赦下さい。

退任後も当分の間は、私も前向きの生き方をしてみたいと考えています。

お詫びと訂正

編集の不手際で、下記の誤りがありました。ご訂正の程お願い致します。

◆会報21号（平成8年11月）

①14頁：下段枠内、「お詫びと訂正」文中、「教授就任ご挨拶（坂本公孝教授分）」を「教授退任ご挨拶」に訂正

②15頁：「O157感染症」の見出しで、執筆者の「諸岡達也（3回生）」を「（2回生）」に訂正

◆95年度版名簿訂正表I（会報21号と同封発送）

・1頁上から2行目：「今田達也」分を削除

以上お詫びして訂正致します。

医局紹介

生化学第二教室の紹介

辻 岡 寛 (15回生)

生化学第二教室は、九州大学薬学部より赴任された池原征夫教授のもと昭和53年に開講しました。以来、濱崎直孝九州大学医学部臨床検査講座教授、織田公光新潟大学歯学部口腔生化学講座教授の二教授をはじめとした優れた人材を輩出しています。

現在のスタッフは池原征夫主任教授、三角佳生助教授、藤原俊幸併任講師、相田美和助手、護山健悟助手 (12回生)、林結香里技手であり、大学院生として辻岡寛 (15回生)、また研究生として笠健児朗 (第一外科12回生)、春田竜美 (大分医科大学、脳神経外科) の九人が所属しています。

各々の研究内容を紹介しておきましょう。国際的にも評価の高い池原教授の研究分野である“細胞内小器官における蛋白質の輸送過程”を教室のメインテーマとし、それぞれの研究がなされています。三角助教授は、主にゴルジ装置に関与する蛋白質の同定とその機能解析をしています。また遺伝子組み換え実験においては福大内外を問わず他教室の研究者のアドバイザー的な役割も担っています。藤原講師は、主に形態学的な手法により、細胞内輸送および細胞内小器官の機能や役割について解明しています。相田助手は、ゴルジ装置と相互作用している蛋白質の性質や役割について解析しています。護山助手は林技手と共に、変異蛋白質の細胞内輸送と分解の機構を解析しています。大学院生の辻岡は、特異な結合様式を持つ膜蛋白質に作用する酵素の作用機序を、研究生の笠は、肝再生因子の作用機序について、春田は、神経小胞に關与する各種蛋白質の相互作用を、それぞれ研究しています。またRI施設の高見昇併任講師、病態生化学系総合研究室の緒方繁憲併任講師とも共同研究を行っています。

毎週土曜日に行われるセミナーでは、関係論文の紹介と、自分の研究の進行状況の報告をしています。くだらない論文を読もうものなら、まるで自分が書いたかのごとく池原教授から酷評されます。また、これまでのデータの評価や今後の方針も話し合われています。それ以外の日はまさに放任主義で、好きに実験をしているのですが、あんまりのんびりしていると二カ月に一度回ってくるこのセミナーで痛い目にあうわけです。放任主義とはいえ、休みの日でも教授、助教授とも朝から出てくるため、他の人たちもあまり休めないような雰囲気はただよっています。(日曜はともかく、祝祭日は休日とはみなされてはいないようだ。) もっとも、実験の性格上あまり休めないのも事実です。

当教室では蛋白質の精製などの基本的なことから遺伝子工学、電顕レベルの解析まであらゆる手技を用いて各自研究を行っており、その成果は国内外の学会と質の高い国際雑誌に発表しています。分子生物学、細胞生物学という分野は、臨床、基礎を問わず、質の高い研究をしていく上では今後避けては通れない分野です。この分野で悩んでおられる方がありましたら、一度当教室を訪れてみてください。厳しい指導が待っていることでしょう。



耳鼻咽喉科医局紹介

坂田 俊文 (10回生)

平成9年4月現在、当医局には加藤寿彦部長教授を筆頭に、講師1名、併任講師2名、助手4名、医員1名、研修医10名、大学院生3名が所属しており、昼夜を問わず診療活動や研究活動に励んでいます。この他筑紫病院には森園哲夫教授を始め、助手2名、医員1名が、また関連病院等には7名が勤務しています。人数だけに注目するとマイナーな科としては充実しているようですが、研修医が医局全体の約 $\frac{1}{2}$ を占めているところに、われわれの苦渋と希望とが交錯した複雑な思いが生まれます。

当医局では毎朝7時30分から聴覚学、平衡神経学、診断学を中心としたモーニングカンファレンスを行っており、研修医には全員参加を義務づけています。彼らはパンやカップ麺を口に運びながらも、目と耳だけは懸命に資料や司会者に集中させています。一方、臨床面では1年目から外来診療が課せられています。無論、再来患者さんの単純な耳・鼻・咽喉頭の処置だけですが、早いうちから患者さんを診察することで少しでも多くの実践経験を積んでもらおうという意図があります。カンファレンスにしても外来診療にしても、研修医を指導する立場にある医師には多くの忍耐力と責任が要求されるわけですが、あと4、5年も先になれば中堅層が増え、また後輩に教えることで自分自身も成長するのですから、外来・病棟臨床、研究面とも、一層充実したものになるという期待を持たずにはられません。

さて、耳鼻咽喉科では全員が医局内に机とMacとを所有しています。だからどうしたといわれればそれまでですが、少なからず重要

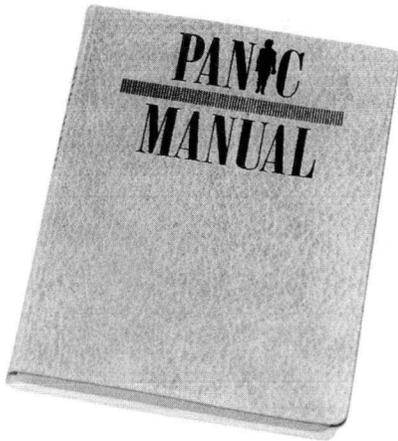


なポイントではないかと考えています。医局に机があれば好むと好まざるとにかかわらず、朝夕を問わず顔を合わせ言葉を交わす機会が多くなりますから、公私にわたりお互いの情報交換が容易で、研究活動の計画から宴会の企画まで速やかに事を運ぶことが可能です。また全員がパソコンを所有し操作できるので作業効率や冗長度が増し、実験のデータ解析をするにもゲームで点数を競い合うにも大変便利です。これらは他愛のない事かもしれませんが、医局という集団が適度なまとまりを保ちながら、様々な分野において機動力を発揮するためには決して無視できない要素だと考えています。換言すれば当医局のセールスポイントとさえ言っても差し支えないと思います。

今年は5月から4名の研修医を迎える予定になっています。彼らが一日も早く医局に馴染み、われわれと共に働き、一人前の耳鼻咽喉科医として成長してゆくことは医局員全員の願いです。それ故、私が医局長として彼らのためにまず最初に行わねばならない仕事は、4人分の机を確保することかもしれません。

パニックマニュアルについて思うこと

パニックマニュアル第2版編集委員 木下昭生(5回生)



今回、皆様のおかげでパニックマニュアル第2版を無事出版することができました。パニックマニュアルは、福岡大学医学部同窓会の事業の一環として、主に先輩から新研修医への実際的なアドバイスとして1992年に初版が発行されました。当時、私は、同窓会とは全く無縁で、アメリカ、オハイオ州クリーブランド・クリニックに留学中で、アメリカ人、インド人、中国人にまじって高血圧の研究中でした。すなわち、“福岡大学医学部”というより、“日本人”代表という意識で毎日を過ごしていました。そんなある日、パニックマニュアルの初版が日本から郵送されてきました。パニックマニュアルの表紙から、福岡大学医学部、医学部同窓会の“我々は頑張っているぞ”という熱い息吹が伝わり、久々に福大医学部を意識しました。正直いって本の内容うぬぬんより、本を最初に手にしたときの驚きと感激の方が強く印象に残っています。留学から帰国して、まもなく、そのパニックマニュアルの改訂の編集委員について高木会長からお話がありました。突然の話で驚いたのですが、あのアメリカでの感激を思い出し、引き受けさせて戴きました。初版編集委員の馬渡先生を始めとする同窓会理事の先生方のアドバイスや研修医の先生へのアンケート

ト等から初版の見直しを行い、初版時には必ずしも達成されていなかった、もっと実践的なパニックマニュアルにしようと考えました。すなわち、見出し項目を科別から症候別にする、救急治療薬を商品名にすること、さらに本のサイズを半分にし、いつでも携帯可能にすること等です。また、部分改訂ではなく、全面改訂を目標とし、そのため原則的に執筆者の先生も、その項目が専門で、しかも初版とは異なった先生にお願いすることにしました。以上の方針で、18人の先生に執筆をお願いしたところ、いずれも快諾して戴き、今回第2版の発刊と相成った訳です。最初に皆様のおかげでと書きましたが、今回の改訂には、執筆者の先生を始め、同窓会の理事の方々、事務局の池田さん、ロータリー印刷の鶴さんなどの多大なご協力のおかげで発刊できました。心より感謝致します。

ただし今回のパニックマニュアルについても、全体的な考案も含め、改善すべき点は多々あると思います。一部の先生方からは、パニックマニュアルは新研修医だけに配ればいい、同窓生全員に配布するのは無駄だという意見もいただきました。この点も含めまして同窓生の先生方の忌憚のないご意見をお聞かせ願えればと思います。いずれにしろ医学は日進月歩です。10年前は胃潰瘍が抗生物質で治るなんて誰も考えませんでした。“10年前の非常識”が現在では常識になりつつあります。パニックマニュアルも新しい常識を後輩に伝えていく手段として3年毎の改訂が必要と考えます。次の第3版のパニックマニュアルがより素晴らしいものとなることを期待しています。

最後に、現在、研修医むけのいわゆるレジデントマニュアルといわれるものが数多く存在しています。しかし、それらの中には記載されていない、いい意味での“福大での常識”を後輩に伝えられる、そんなパニックマニュアルであればと思っています。

支部便り

熊本支部

支部長 魚返英寛(5回生)



熊本支部では本年1月一回生で初代支部長の原先生が逝去され支部一同、心より御冥福をお祈り致しております。

昨年5月に支部会総会を開き20名の出席と、本部より高木会長に来て頂き手ごたえを感じました。10月には第一回ゴルフコンペを緒方、東先輩の御好意により、天草カントリークラブで開き盛況のうちに終えることが出来ました。

また12月には有信会熊本支部より幹事会、忘年会の招待があり、私と緒方健一副支部長が幹事となりました。その際県下の開業医、基幹病院勤務医の一覧表を配布しお役に立てればとネットワークを広げました。

本年5月17日には平成9年度の支部総会を

予定し、県医師会長に御講演をお願い致しております。翌18日には有信会と合同でゴルフコンペをする予定です。

また有信会の中に弁護士、会計士、税理士などが集まって出来た七隈会という会があり、どうしても我々医師の入会をとの事で毎月1回の勉強会に出る様にしています。というところで着実に同窓会の輪を広げつつあるとは思いますが。

熊本は熊本大学しか医学部がありませんので医療機関や医療のあり

かたは良く言えば保守的、悪く言えば排他的と思われる。しかしながら、全国でも珍しいオープンシステムをとっている病院が2つあり、私はその1つである熊本地域医療センター(医師会病院)を繁用し、ハイリスクの患者さんはそこで手術を行い福大ここにありとアピールしています。

本年は城間先生、金光先生が開業され、地域に根ざして一歩一歩着実に福大出身の輪が定着しつつあります。皆さん忙しく、各々の所属医局やLoyaltyの違いなどあるかとは思いますが、よい意味での結束とネットワークを作り、卒業した福大医学部とその同窓会の発展を願い、支部会をより確固たるものに出るよう益々努力していくつもりです。

支部長さんへお願い：写真に写っている方の名前を書いて下さい

支部便りの写真をご覧になった読者から、「懐かしい顔が写っているけれども、名前が思い出せない。名前を書いてもらえないだろうか」という要望が出ています。今回は佐賀支部の写真に名前をつけて戴きました。ご面倒ですが、他の支部でもできるだけご協力戴けないでしょうか。フルネームで、卒業回も書いて戴いたらなお有り難いという声もあります。

編集部

宮崎県支部総会報告

支部長 野田 寛 (4回生)

平成八年十二月十四日、暮れの忙しい中にもかかわらず、十二名(写真では一名遅刻で十一名しか写っていません)の出席がありました。総会では同窓会会則の確認・四地区の報告(宮崎県は県北・県央・県南・県西に分けて分会があります)、平成七年度会計報告・平成八年度の同窓会総会報告を行いました。その後、懇親会を開きました。

今年十三回目ですが、毎年参加者の顔ぶれは同じようで、勤務している先生方の出席が少ないようです。

今、医療界において多難な時代となり、今後もさらに厳しくなっていくことは誰もが考えている事だと思います。

今こそ、同窓会を通じて、また大学間・医師会間が結びつき、医師として団結をしていかなければならないと思います。同窓会は皆が遠慮なく物事を話し合える場です。福大同窓会の今後歩んで行く道の一つとして横のつながりも必要だと思います。

います。

最後に熊本県山鹿市で小児科を開業していた第一回生の原邦夫先生が平成九年一月に死去されましたことは、友人の一人として、また同窓会の一人として大変残念でなりません。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

一九九七年三月十九日



大分県支部会 (かぼす会) だより

支部長 鬼木 寛二 (1回生)



第1回県支部会を平成6年6月25日、支部発足時に行ってから早3年、第3回支部会を

昨年11月16日に開催しました。現在、県支部会正会員総数は55名と増えつつあります。

下記役員によって、「かぼす会」を盛り立てて行かねばならないと思っています。

支部長：鬼木 寛二
副支部長：増井 節男
評議員：中村 英助
会計：難波 美和子

第3回県支部会の出席者は9名と少なかったですが、これは県支部会への関心が薄い(一部の者はそうだろうと思いますが)訳

ではないと信じております。私、1回生をはじめ福大出身者は、地域医療に於いてはまだ中堅～若輩の存在で、今が最も医療に力を注ぐ時期で、多忙であった為に欠席者が多かったのではないかと思います。第4回、第5回と回を重ねる内に出席者も増え、昔をあるいは今を語り合うようになり、縦横の連携も強くなると思うし、そうせねばならないと思っております。

一人前になると自分一人でもやって行けると思うかもしれないが、やはり他科の助けが必要（同窓生なら更に良い）な時が必ずおとずれるはず。このような時に、ネットワークがしっかりしていると非常に助かると思います。

「かばす会」諸君、頑張ろうではありませんか！

佐賀県支部便り

支部長 内田敏文（4回生）

陽春の候、皆様にはますますご清祥のこととお喜び申し上げます。早くも本年で第20回目の卒業生を迎えることになりました。

この度、永瀬先生の後任として、佐賀県支部長になりました第4回卒業の内田敏文です。現在、佐賀県支部は、正会員、準会員合わせて92名の大所帯となっています。私どもは、県内を七地区に分け各々に2名づつ代表を決め、代表会を年に3回開催することにしており、会員に連絡が行きやすくなるように心がけています。又、平成8年9月1日付けにて、同窓会佐賀県支部規約を作成し、今後の活動をより活発に行っていきたいと思っております。最近の活動としては、平成8年11月16日に、佐賀東急インにて第4回佐賀県支部会を、脳外科教授朝長正道先生、高木忠博同窓会会長を招いて開催しました。しかし、出席者は

少なく20名で、ほとんどが6回生までで占められ、19回生までの若い卒業者の出席を促すことが、今後の課題だと思っております。又、同窓会の存在感をアピールし、必要性を理解してもらえるよう努力していきたいと考えております。

縦、横のつながりを強くするために、勉強会、スポーツなどを企画し、より一層頑張っていきたいと思っております。平成8年11月17日には、武雄若木カントリークラブにてゴルフ親睦会を行いました。朝長教授も来られる予定でありましたが、急患にて欠席となり非常に残念でした。次回はぜひ一緒にラウンドしたいものです。

皆様の、今後ますますのご活躍を期待しております。



川副 石河 山津 副島 古賀 大隈 平川 伊東 瀬戸 平川 今泉 齊藤 副島 森 吉村
小川 橋本 菊地 高木 朝長 内田 永瀬 福岡 今泉

ーキャンパス便りー

医学祭を終えて

第16回医学祭実行委員会

委員長 前川 信一 (5年生)

去る平成8年11月1日(金)より4日(月)までの4日間、七隈キャンパスにおいて医学祭を開催いたしました。今回は医学部創立25周年にあたる年でもあり、医学部のこれからの発展を願いつつ、医学祭もその一役を担うことができたと力を入れて参りました。

今年のテーマは「知りたい医学が、ここにある」という事でしたが、学生なりの視点で、医学・医療というものを考え、来場者の方々に日頃学んで入るものを見て頂こうと思い、このテーマにしました。医学祭のメインはやはり日頃の学業を反映させている医学展にあると思います。今回の医学展は4日間の期間中、3日間を図書館ゼミ棟の8・9階で開催いたしました。例年より開催期間が1日少ないにもかかわらず、例年以上の方々(約1,800人)にご来場頂きました。企画別にみても例年以上の方々にご来場頂いています。

医学祭も今回で16回目をかぞえ、年々盛り上がりを見せるようになりましたが、これもひとえに同窓会の諸先生方のご指導・ご協力のお陰であり、併せて学部学生の努力の賜物ではないかと思えます。

ですが、医学祭を開催するまでの準備段階

において、様々な問題が山積みになっているのも現状であります。資金的な問題、運営するにあたっての組織的な問題等、これから一つ一つクリアしていき、より良い医学祭が開催できるように努力していかねばなりません。医学祭というものは、学生生活をより活気のあるものにするために行っていると、我々実行委員は信じて努力しています。

学生・同窓会の諸先生方、福岡大学医学部にかかわる方々の一人でも多くの方が、実行委員と同じ気持ちで医学祭をとらえ、医学祭が少しでも医学部の発展の一役を担えるよう、これからも努力して行くことと思えます。

平成9年度第17回医学祭は、上田秀一君を委員長とし、実行委員が一丸となってよりよい医学祭を創り上げることでしょう。

どうか皆様、これからも医学祭にご協力下さい。またご指導の方も併せてよろしくお願ひ致します。

最後になりましたが、第16回医学祭を開催するにあたり、ご協力・ご指導下さいました諸先生方、ならびに関係者の方々に厚く御礼申し上げます。誠にありがとうございました。

卓球愛好会の活動状況

主将 工藤 忠 睦 (4年生)

私達卓球愛好会は、現在男性10名女性2名のあわせて12名で活動しています。練習は基本的に週3回の月、水、金で、場所は講義棟の中講堂の廊下で行っています。部の雰囲気は良く、部員も各々の能力やペースにあわせて練習をしています。

さて、昨年度の活動状況ですが、昨年度は男子が九山で12校中11位と前年の最下位から



ようやく脱する事ができ、西医体では緒戦を突破することができました。女子も万年人数

不足ではありますが、九山の個人戦で上位入賞を果たすなど、僅かではありますが、経験者が少なく殆どが大学に入ってから始めた初心者ばかりの愛好会としては、少しずつ進歩していることと思います。又、県内4校の医学部で行う4校戦の他に、前主将の時からはじまった久留米大学と福岡歯科大との3校戦

や、西医歯薬体育大会への参加など、一年を通して目標をもって練習できる状態にしようと活動して来ました。

今年には九山・西医体の団体、個人戦の両方で、昨年以上の成績を残す様頑張っていますので、OBの先生方には今後とも一層のご指導をよろしくお願いします。

空手愛好会

主将 平田 顕士(4年生)

私達空手愛好会は、ここ数年優勝から遠ざかってしまいましたが、道場の先生やOBの方々の熱心な指導と応援で、一昨年ようやく九山で優勝する事が出来ました。

そして、一昨年優勝した事で皆さんに祝福され、さらなる期待をかけられると、我々もその気になり、もう一度優勝の感動を味わい



たいという気持ちが高まり、日頃の練習でも自然に熱が入るようになりました。その結果、去年の九山では、団体戦準優勝、個人戦では優勝と3位、新人戦でも準優勝という成績を残す事が出来ました。

しかし、西医体では、毎年予選では勝ち続けるものの、決勝トーナメントでは1回戦敗退という結果が続いています。特に去年は他の大学のレベルが上がっており、驚きを隠せませんでした。しかし西医体で優勝してこそ、周囲に認められ実力を評価されるものだと思います。

当然の事ながら、みんな頑張って、先ず個々のレベル上げない事には結果を期待する事は出来ません。個々のレベルが上がればその分だけ練習もハイレベルとなり、お互い切磋琢磨してますます強くなると思います。口では簡単ですが実行するのは難しい事です。しかし「優勝」とはやはり限りない感動です。その感動をもう一度味わうために頑張ります。

フェンシング愛好会

主将 内藤 雅康(4年生)

現在我が愛好会は、1年生1人、2年生1人、3年生2人、4年生1人、5年生1人の6人で活動しています。もともとフェンシングは、個人の競技であって、人数が少なくてもやれるスポーツであります。しかし人数が少ないと、部活自体の活気にも影響してまいります。また部員6人と言っても、その内3人は兼部しており、正式部員は僅かに3名と言うのも寂しい限りです。

さて活動としては、ルーチン練習週2回、

1回2時間の練習、試合前にはその週間を通して毎日練習する事にしています。これだけの練習では練習時間が少ないとお叱りを受けるかも知りませんが、昨年の北九州会長杯フェンシング大会で、2位、3位をとるという快挙を成し遂げました。もしかして我々は天才ではないかと思っています。

フェンシングは西医体種目でないので、我々はつまるところ社会人を相手にした大会に出場するという事になります。そしてその社会人を倒すと言う事は、これはまさに一服の清涼剤、練習に身が入り、生活に張りが出てまいります。

さて今年の計画ですが、先ず第一に部員を

増やす事。勿論、数合わせではなく、やる気のある事が第一条件です。第二は昨年以上の成績を上げる事。練習に励み、北九州会長杯

は勿論の事、その他の大会にも積極的に参加して、誇れる足跡を重ねて行きたいと思いません。西医体が無い分まで頑張ります。

ソフトテニス愛好会

主将 西村卓朗(5年生)

私達ソフトテニス愛好会は現在、男子15名、女子13名の計28名で活動しています。今年男子2名、女子4名の6年生が卒業されました。優秀な方々ですので、これからのご活躍を楽しみにしております。

現在、練習は男女の隔日制にしており、週3~4回行っています。皆少ない練習時間を懸命に練習しています。

大会は九山、西医体の他に、春の産業医大、九大との三校戦、秋に行われる「神田杯・中村杯・中島杯」、それに時々の他大学との練習試合です。

今年の九山では昨年よりも順位を落とし6位でしたが、個人戦では準優勝を果たしました。西医体では男子が団体ベスト16に入ることができました。女子も負けはしましたがいい試合内容でした。また全医体の個人戦でベ

スト8に入ったペアもあり、徐々に福大の名前も売れてきました。皆の気持ちも段々高揚してきています。

また、最近では男女共にとてもやる気のある下級生が入ってくれて、これからの活動が益々盛んになるだろうと思われます。

九山や西医体で他大学の先生方と話をするとき、OBの皆様の学生時代のご活躍を耳にする事があります。私達も先輩に負けないよう頑張っていこうと思います。どうか今後ともご指導ご支援の程、宜しくお願い申し上げます。



漕艇愛好会

主将 富安孝成(4年生)

我々漕艇愛好会は、現在2年生2人、3年生3人、4年生4人、5年生2人、6年生2人で活動しております。多くの方がボートという競技をあまりご存じないと思いますので、簡単に説明させていただきます。

ボートにはシングル、ダブル、フォア、エイトと、大きく分けて4つの種類があり、我々はフォアという競技をしています。艇はFRPで作られたもので、非常に軽いシェルと呼ばれるものと、木製の重いナックルと呼ばれるものがありますが、競技はシェルが中心となって行われています。

フォアの場合、漕手が4人おり、別にコッ

クスと呼ばれる者が1人乗り、舵取りや、レースの駆け引きを行います。よって5人がクルーと呼ばれ、1つのチームになります。

我々の活動は平日は毎日行っています。試合前は日曜日でもだいたい練習していますが、前述のようにボートは5人のクルーが集まらないと練習できませんので、週3日程は陸上トレーニングという事になります。



ボートを漕ぐにも、東区の多々良川まで行かねばなりませんし、決して楽な部活ではありませんが、それでもみんな楽しみながら活動しています。チームワークの非常に良い部です。

大会の成績の方ですが、近年は徐々に力をつけて来て、昨年度の西医体ではシェル、フォアで念願の決勝進出を果たしました。

今年は九山の主管となっていますので、部員一同、特に張り切って活動しています。

海外研修を終えて

鬼倉基之(3年生)

私は、今回福岡大学の海外研修ということで、オーストラリア、クイーンズランド州にあるグリフィス大学へ1ヶ月間行ってきました。

海外で長期間生活するのは初めてでしたし、英語という使い慣れていない言葉で、人とのコミュニケーションを取らなくてはならないということで、心に大きな不安を抱いていました。

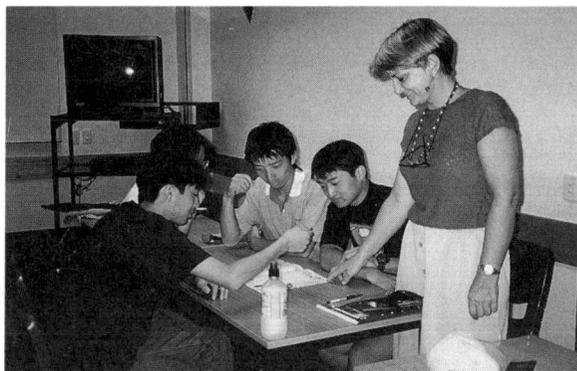
現地では、午前中英語の授業を受け、午後、週末は自由時間が持てました。授業では、主に日常生活で使う言葉や、オーストラリア独自の英語表現、そしてオーストラリアの文化、自然、歴史などを学びました。授業を受けて特に感じたのは英語教育法の違いでした。日本の中学・高校では、英語を文法、リーディング、リスニングと分けて教えられるのですが、“英語は慣れ、親しみ、実際に使う事が一番の修得方法”という考えに基づいて授業は進められました。日本で一通り英語教育を受けていたおかげか、“積極的に思った事を英語で表現する”という事を心掛けただけで、日常生活で困る事はありませんでした。

日本を発つ時には幾つかの目的がありましたが、今回の研修は全学部共通だったので、特に医学に関する研修を受ける事はありませんでした。しかし、それ以上に予想していなかった事をたくさん経験できました。日本とオーストラリアとの文化や生活様式、そして人々の考え方の違いなど多くの事に刺激を受けました。私達が生活したブリスベンの街は、人が人らしく生きるためには最高の環境だったと思います。街はたいへん美しく、そ

のままの自然や休日に人が休息できる施設がたくさんありました。そのような環境の下で生活している人達は、皆生き生きとして見えました。私はこの1ヶ月間で多くの人達と出会いましたが、十代の学生から年輩の人まで全員がそれぞれの考え方や目標を持ち、自分自身が今為すべき事をしっかりと認識していました。独立心の強さをたいへん感じました。教育や環境の違いがこのような気質や考え方の違いを生むのだと思いました。

私が将来医師になれば、多くの患者と接することになります。又、社会人としてもっと多くの人と接することと思います。日本人以外の外国人と接する可能性もあるでしょう。今回の研修で母国語ではない英語を用い、本当に多くの人達と語り合い、意思疎通が図れた事はたいへん貴重な経験でした。

ほんの短い期間でしたが、1ヶ月間の英語の授業を受け、多くのオーストラリア人と接することで、英語力も少しは上達できたと思います。この1ヶ月間で学んだ事、経験した事の全てをこれからの人生で大いに役立てたいと思います。



出会いとやさしさ

重 森 裕 (3 年生)

1997年2月24日、待望の日はやってきた。そう、その日は、私のオーストラリアへの語学研修の始まりの日である。昨年の秋から福大内の選抜試験、学年末試験 etc をどうにかクリアして、やっと出発の日までこぎつけた。今回の医学部からの参加は鬼倉君と2人である。

出発前の第1回オリエンテーションでは、お互いが知らない人ばかりで何となく不安だったが、第4回目が終わる頃には、先生を含めて、この20人でオーストラリアへ行けば“楽しいはず”と思わせるまでになった。実際この仲間は、明るく行動的で、それでいて思いやりのある、やさしい連中であった。

オーストラリアでも素晴らしい出会いが待っていた。特にグリフィス大学の先生方とホストファミリーである。先生方には、ブリスベンシティのナイトツアー・ショップ、そして最後の週にはディスコまで連れていって戴いた。

勿論、毎日午前中は大学内で授業を受けた。しかも単に英語だけでなく、ダンスなどの雑学も教えてもらった。

ホストファミリーも本当に良くしてくれて、毎日のバス停迄の送り迎えやドライブなど、家族以上の心遣いをしてもらった。特に最初の2~3日間、相手の言っている事がよく聞き取れず、意味が理解できなくて落ち込んでいると、そんな私に向かって“What can I do for you”と言葉をかけてくれた。そのやさ



しさに不覚にも涙が出そうになったが、おかげでこの一言で私は急に元気が出た。思えばこれが私の最高の瞬間、オーストラリア生活を楽しませてくれた起点となった。

今回の語学研修では、実際のところ、大学生同士の交流というものをかなり期待していたが、そういう企画は全く無く残念であった。今後の改善が望まれる。

しかしながら得たものも多く、オーストラリアの文化や風習にも触れる事ができたし、この国の人々のやさしさや、他人に対する思いやりの深さなどは特に直接肌で感じた。そして最後に“英語は難しいけど易しい”という事も十分に認識できた。

私はこの素晴らしい時間を、素晴らしい人々と過ごせたことを幸せに思う。私はこれからの人生に、英語に関する事は勿論、この経験を十分に生かして行きたいと思っている。

国際交流校とその内容

	大 学 名	交換留学	短期研修	奨 学 金
英 国	ニューカッスル大学	10人(1年)		旅費
英 国	リーズ大学	10人(1年)		旅費
韓 国	ウルサン大学		20人	旅費、授業料
豪 州	グリフィス大学	2人(1年)	20人	旅費
米 国	カンザス大学	2人(1年)		旅費、生活費
米 国	ウオッシュバン大学		20人	旅費
米 国	ジョージア工科大学	計画中		
ベルギー	ルーヴァンカトリック大学	計画中		

計 報



原 邦夫君を偲んで

山崎医院（福岡市）

院長 山 崎 節（1回生）

平成9年1月8日、福岡大学医学部1回生で、熊本県山鹿市で小児科・内科を開業されていた原邦夫君が、直腸癌の為九大病院で死去されました。享年45才、平成6年夏に熊本地域医療センターで直腸癌の摘出術を受けてから約2年半後の事でした。

原君は熊本の名門、済々黌高校を卒業され、昭和47年に福大に入学。53年に卒業後、小児科学教室に入局されました。南福岡病院や対馬病院に勤務された後、（正確な日時は不明ですが）昭和58年頃には山鹿に帰られ、お父上と一緒に原医院を新築移転して、地域医療に取り組んでこられました。地域では数少ない小児科医でもあり、昼夜休日を問わず、受診する患者さんには常に優しく親切に対応しておられ、山鹿市のみならず近郊からの患者さんも多く、毎日150名以上の患者さんを診察し、信頼も厚かったと聞いております。

私は年に数回、休日に山鹿の彼の自宅を訪ねていましたが、その際には必ずと言って良いほど患者さんからの電話がかかってきて、原君は中座して診察に行かれる状態でした。

幼少の頃から気管支喘息があり、常時吸入器を持ち歩かれていた状態でしたので、原君は運動は特にされてなかったようですが、ジャズとオーディオが好きで、福岡時代からスタジオ用のモニター・スピーカーを真空管アンプで鳴らして楽しんでおられました。クルマもお好きでしたし、手術後はパソコンで余暇を過ごしておられました。

地域の医師会の理事の他、私がかを会長を務め

ていた際には、福大医学部同窓会熊本支部設立にもご尽力いただき、初代支部長としてその基礎を作っていました。

原君は平成3年秋ごろから異常に気付かれていたようですが、お父上が肺癌の為入院された後、4年の初めに亡くなられ、その直後にはお母上も亡くなられるといった事情もあってか、夏まで放置した格好となり、根治手術も危ぶまれる状況での初回手術でした。

退院後も休む間もなく、診療を始められていたのですが、膿瘍ができたりしてなかなか肛門部の痛みが取れず、困っていらっしゃいました。

平成8年に入ると痛みや熱が続き、骨盤腔内の再発が疑われ、弟さんが勤務する九大病院での治療を選択され、2月末に入院、7月まで再手術、放射線療法を受けられました。退院後も痛みは取れず、結局8月末で原医院を閉鎖され、10月中旬再度治療の目的で九大病院に入院されましたが、経過もはかばかしくなく新年早々鬼籍に入られました。

原君の息子さん二人は鹿児島県の学校に行かれており、奥さんも鹿児島で暮らされていますので「何とか鹿児島で最後を」とも思っておりましたが、結局果たせませんでした。

命を削るようにして10年以上に亘って地域医療に貢献され、人生をエンジョイする時間も短く、若くして旅立たれた原邦夫君の無念は想像に難くありませんが、45年間を懸命に駆け抜けられた今、安らかに眠っていただきたいと友人一同祈念いたしております。

教職員人事 (講師以上)

'96.10.2 ~ '97.4.1 円内の数字は福大医学部卒業回

項目	所属	資格	氏名	発令日	備考
退職	内科学第一	教授	奥村 恂	'97. 3. 31	定年
	小児科学	教授	小田 禎一	'97. 3. 31	定年
	公衆衛生学	教授	重松 峻夫	'97. 3. 31	定年
	産科婦人科学	教授	白川 光一	'97. 3. 31	定年
	薬理学	教授	古川 達雄	'97. 3. 31	定年
	整形外科学	助教授	葉 山 泉	'97. 3. 31	白十字病院
	精神神経科	講師	川谷 大治	'97. 3. 31	開業
	内科第二	講師	仁位 隆信 ④	'97. 3. 31	唐津赤十字病院
健康管理科	講師	中村 豊	'97. 3. 31	九州電力	
採用	公衆衛生学	教授	守山 正樹	'97. 4. 1	長崎大学
	内科学(含健管)	教授	山田 達夫	'97. 4. 1	千葉大学
	外科学第一	助教授	志村 英生	'97. 4. 1	九州大学
	衛生学	助教授	宮崎 元伸	'97. 4. 1	厚生省
	内科(含健管)	講師	高橋 三津雄	'97. 4. 1	福祉村病院
昇格	内科学第一	教授	浅野 喬	'97. 4. 1	健管センター
	産科婦人科学	教授	金岡 毅	'97. 4. 1	
	産科婦人科学	教授	瓦林 達比古	'97. 4. 1	
	生理学第一	教授	坂本 康二	'97. 4. 1	
	整形外科学	助教授	諫山 照刀	'97. 4. 1	
	小児科学	助教授	廣瀬 伸一 ③	'97. 4. 1	
	眼 科	講師	大里 正彦 ⑨	'97. 4. 1	
	内科第二	講師	野田 慶太 ⑥	'97. 4. 1	



医学部前の楠の並木

医局長・医長名簿

診療科	医局長	病棟医長	外来医長
[福大病院]			
内科第一	司城博志	大隈健司 ⑩ (6西)	瀬尾充
内科第二	渡辺憲太郎	浦田秀則 ③ (6東)	野田慶太 ⑥
〃		小河原悟 (6南)	〃
内科(含健管)	松村洋 ⑨	廣岡満 ⑤ (6北)	間英二
〃		宗清正紀 (7階)	仁位周介 ⑧
精神神経科	早稲田隆 ⑨	石井久敬	米澤利幸
〃(ディケア)			伊藤正訓 ⑩
小児科	廣瀬伸一 ③	安元佐和 ⑦	小川厚 ⑥
外科第一	嘉数徹 ⑤	田中伸之介 ⑤	濱田雄蔵
外科第二	岡林寛	秀島輝 ④	酒井憲見 ⑧
整形外科	柴田陽三 ④	副島修 ⑨	井上敏生
形成外科	大慈弥裕之 ③	谷口靖	谷口靖
脳神経外科	山本正昭 ⑦	木村豪雄 ⑨	継仁 ⑧
心臓血管外科	河野雄幸 ②	助広俊吾 ③	松吉哲二
皮膚科	清水昭彦	渋谷賢一	清水昭彦
泌尿器科	田原春夫 ⑤	松岡弘文 ⑧	鐘ヶ江重宏 ⑪
産婦人科	江本精	牧野康男 ⑧ (3東)	本庄考 ⑩
〃		蜂須賀徹 (3北)	〃
眼科	加藤整 ⑧	大里正彦 ⑨	蜂谷隆彦 ⑧
耳鼻咽喉科	坂田俊文 ⑩	柴田憲助 ⑨	武末淳 ⑩
放射線科	野崎善美 ④	秋田雄三	東原秀行 ⑥
麻酔科	生野慎二郎 ⑧	平田和彦 ⑫	平田和彦 ⑫
歯科口腔外科	古賀勉	瀬戸富雄	豊福明
病理部	鈴宮淳司		
臨床検査部	高田徹		
輸血部	鷹野壽代		
救命救急センター	半田耕一	山崎繁通 ⑧	
[筑紫病院]			
筑紫病院	二宮寛 ②		
内科第一	諸江一男 ③	宮脇龍一郎	副: 占部嘉男 ⑤
内科第二	二宮寛 ②	副: 有富貴道	二宮寛 ②
消化器科・内視	中林正一 ②	副: 竹中国昭 ③	副: 櫻井俊弘
小児科	大府正治 ②	山戸康司 ⑩	大府正治 ②
外科	山崎宏一 ④	立石訓己 ⑧	稲田繁充 ⑧
整形外科	城戸正喜 ①	池田正一	有永誠 ⑧
脳神経外科	吉永真也 ⑤	中山義也 ⑨	吉永真也 ⑤
泌尿器科	石井龍 ⑤	竹内文夫 ⑭	石井龍 ⑤
眼科	武末佳子 ⑪	加藤博彦 ⑫	加藤博彦 ⑫
耳鼻咽喉科	宮城司道 ⑨	宮城司道 ⑨	宮城司道 ⑨
放射線科	小野広幸 ⑦		
麻酔科	水城透 ③		
病理部	溝口幹朗 ⑥		

○内の数字は卒業回

会議報告

◆8-5 理事会

平成8年11月22日(金)19時

1. 準会員加入申請者の審査
2. 福大60周年募金
3. 医学祭の反省
4. 新入生歓迎会のあり方
5. 慶弔贈与基準
6. 医学部25周年記念行事と16回総会

◆8-6 理事会

平成9年1月31日(金)19時

1. 平成9年行事予定
2. 平成8年度手数料収入の見通し
3. 今後の同窓会のあり方
4. 会報のマンネリ化打破のために
5. 研究助成金

◆8-7 理事会

平成9年2月28日(金)19時

1. 会則、細則の改正
2. 研究助成金規程の改正
3. 同窓会カード

◆8-8 理事会

平成9年3月28日(金)19時

1. 会則、細則の改正
2. 平成9年度事業計画
3. 平成8年度収入支出見込み
4. 平成9年度収入支出予算案
5. 8-2評議員会
6. 医学祭の反省と今後のあり方
7. 医学部25周年記念行事と16回総会
8. 準会員の審査
9. 生命保険紹介代理店の解約

◆8-9 理事会

平成9年4月25日(金)19時

1. 平成9年度事業計画
2. 平成8年度収入支出見込み
3. 平成9年度収入支出予算案
4. 8-2評議員会について
5. 卒後教育
6. 国試対策
7. 研究助成金

ホテル割引案内

◆ホテルニューオータニ博多

[婚礼を挙げられる時の特典] (烏帽子会会員及びその子女対象)

- | | |
|----------------|-------------------|
| ①婚礼セット料金の10%引き | ②新郎・新婦の宿泊を、一泊無料招待 |
| ③結婚1周年ディナー招待 | ④オリジナル記念品のプレゼント |

[宿泊の特典] (烏帽子会会員及びその子女対象) 宿泊料金の15%割引

* ご用命の時、会員である旨を申し出て下さい。

〒810 福岡市中央区渡辺通1-1-2

TEL 092-714-1111

FAX 092-715-5658

◆ホテルブラッサム福岡

[客室料金の割引] (予約した会員及び会員の紹介客) 一律10%割引

* ご予約の時、会員である旨を申し出て下さい。

〒812 福岡市博多区博多駅東2-2-4

TEL 092-413-8787

(JR博多駅新幹線口)

FAX 092-413-9764

同窓会の保険へ加入のお誘い

我が同窓会では、三井生命及びアリコジャパンと契約して各種の保険を取扱い、その手数料収入を同窓会運営や事業経費の一助に当てています。下記はその一部ですが。この他にもあらゆる分野の保険を扱っていますので、会員の方が保険に加入される時には、ぜひ同窓会扱いの保険にご加入して戴きますようお願い致します。

*三井生命 扱い 担当 多田 由美子

- ◆終身保険……高額保障と、生涯保障、ご希望の方には家族年金も。
・大樹 暖家族（あったかぞく） ・大樹 スター ・メッセージ
- ◆養老保険……高額保障とご希望に応じ資金準備も。
・大樹 らいふプラン ・ザ・らいふ
- ◆連生終身保険……夫婦お二人の高額保障と生涯保障
・大樹 夫婦の保険 Mighty ・夫婦の保険 Unity
- ◆疾病・医療保険
・特定疾病保障保険 ナイスリー ・医療保険 アシスト ・医療保障保険（個人型）
- ◆海外旅行生命保険

*アリコジャパン 扱い 担当 南 修二

- ◆所得保障保険……病気や怪我で働けなくなった時の保障
35才男性、保障額月50万円、障害死亡2,500万円で、保険料月額11,100円
- ◆福医協グループ保険……福岡県内の開業医、勤務医加入可。加入は告知書だけ。
40才男性、死亡保険金5,000万円で、保険料月額9,650円。
- ◆勤務医・医師賠償責任保険……複数病院の医療業務すべて対象。年払い、月払い選択可。

自動車保険も扱っています。

（保険料各社共通、無事故実績も継承）

お問い合わせは

三井生命	多田 由美子	: 092-883-1480	または	030-418-8636
アリコジャパン	南 修二	: 092-282-5505		
医学部同窓会	池田 静夫	: 092-865-6353	（直通）	内線は 3032

事務局からのご連絡

寄付金有り難うございました。(平成9年4月現在)

- ・95年版会員名簿寄付金 422件 1,226,000円
- ・パニックマニュアル第Ⅱ版寄付金 598件 1,794,000円

◆福大創立60周年記念募金応募状況(平成9年3月現在)

卒業回	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
応募数	20	24	17	17	18	11	13	13	10	4

11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	計
7	13	5	4	1	5	1	2	37	51	273

[註] 応募率 12.7% (ただし、19回生、20回生については、ご両親の応募を含みます)

勤務形態別会員数(平成9年5月現在) 卒業人数 2,153人

卒回	開業	家勤	勤務	留学	不就業	その他	死亡	合計
1	33	5	23	0	1	0	1	63
2	42	9	30	0	2	0	0	83
3	30	12	46	0	1	0	1	90
4	59	11	47	1	0	0	0	118
5	36	15	57	2	0	2	3	115
6	43	14	62	0	0	1	1	121
7	29	14	79	4	2	0	0	128
8	33	15	95	2	3	2	1	151
9	14	9	90	1	1	1	0	116
10	12	8	79	2	1	2	0	104
11	7	7	92	3	6	2	1	118
12	5	3	79	4	1	0	1	93
13	4	4	101	3	3	0	0	115
14	2	4	85	5	1	1	1	99
15	0	2	90	0	2	1	0	95
16	1	1	117	0	1	7	0	127
17	1	0	103	0	0	0	0	104
18	0	0	99	0	0	0	0	99
19	0	0	100	0	1	4	0	105
20	0	0	90	3	0	16	0	109
計	351	133	1,564	30	26	39	10	2,153

◆ラオスのビデオをお貸しします。

8回生、黒岩宙司先生（国立国際医療センター勤務・厚生技官）のラオスにおけるご活躍の状況を、平成7年5月発行の会報18号で紹介しましたが、それがJICAでビデオ化（30分）されたそうです。希望者にお貸し戴けるそうなので、ご覧になりたい方は下記、または同窓会事務局へご連絡下さい。

〒162 東京都新宿区戸山1-21-1

国立国際医療センター 黒岩宙司先生

TEL 03-3202-7181 FAX 03-3205-7860

告！ 第11回生諸氏

来年は早、大学卒業10年目です。

10周年記念同窓会を開催すべく、そろそろ準備を始めようと思います。

準備委員の有志、会にあたっての行事案、その他、なんでも思いつくことがありましたらご一報下さい。もちろん貴方の居場所、隠れ住んでいる同士に関する情報なども大歓迎です。

〔連絡先〕①、②どちらでも結構です。

①武末佳子 TEL, FAX 092-565-3387

②同窓会事務局 TEL 092-865-6353

内線 3032

FAX 092-865-9484

編集後記

今年は同窓会総会が例年の7月ではなく9月に開かれます。そのため今回の会報には総会関係の記事が無いのですが、教授の就任、退任の挨拶や、支部、学生からの原稿が集まりボリュームのあるものになりました。表紙写真には会員撮影の作品を使用する事にしましたので、傑作をお持ちの方は同窓会室へ連絡して下さい。

編集委員 伊東博巳（7回生）

武末佳子（11回生）

笠健児朗（12回生）

立川裕（13回生）

烏帽子会会報第22号

発行日 平成9年5月15日

発行人 高木忠博

編集人 伊東博巳

発行所 〒814-80

福岡市城南区七隈7-45-1

福岡大学医学部同窓会

電話 092-865-6353（直通）

092-801-1011（代表）

内線 3032

FAX 092-865-9484

印刷所 〒810

福岡市中央区長浜2-1-30

ロータリー印刷（株）

電話 092-711-7741

FAX 092-711-7901